

■凡例

- 1 ①②…は形式段落番号。◆は、設問。
- 2 ▽は、本文の追跡・分析。
- 3 ▼は、読解に関する技法。
- 4 ☆は、記述に関する技法。

■前提知識

森鷗外『舞姫』を読んでいることが前提。『羅生門』『山月記』『ころも』『舞姫』は、ほとんどの国語教科書に載っている。入試問題では、それらを読んでいることが当然の前提となる可能性がある。

明治の初め、官僚としてベルリンに留学した太田豊太郎は、貧しい踊り子エリスの窮地を救う。それをきっかけに、二人は深い仲となっていくが…。未読の人は、教科書で読んでおこう。裏表紙の地図なども参考になるだろう。

■見通し読みと追跡見通し読みとは

いつも、ここに「追跡」という標題がついていたのに気がついていただろうか。本文を段落ごとに正確に追跡し、部分設問があれば**停止し**、**周辺を見渡す**。**意味段落の切れ目に気がつけば、停止し**、それまでをふりかえる。追跡が本文末に達すれば、**全体の構成を見渡す**。その上で、読解問題にとりかかる。

この読みの原則は変わらない。

しかし、今まで、いろいろな文章を読んできて、ある程度の知識の蓄えができてきたとするなら、目を近づけて正確に追跡する作業と**同時に**、目を離して見通しを予測しながら読む、**〈見通し読み〉**を並行することを試みたい。その効果は、

・速度アップ

・全体の構成把握の効率アップ

・結局何が言いたいのか、という要旨把握の効率アップ

といったところだ。

例えば、その問題文が「東西文化比較論」だ、と見当がついたとする。日本の茶の湯に対して、ヨーロッパは…といった類の文章だ。見通しのスイッチの入れ方は、例えばこうだ。

「対比だ」「何をモチーフ(材料)としているか」「何の、どういう点をよい(違い)としているか」

これらをふまえておくと、議論がどこへ向かっていくのか、予測(期待)しながら読むことができる。場合によっては、問いが冒頭に立てられていることもある。その

場合には、その問いの答えを**〈見通す〉**ことになる。読み慣れた題材なら、結論を予想できることもあるだろう(もちろん、軽々しく決めつけたら落とし穴にはまるが)。

「BERLIN 1888」の場合

さて、今回の問題文で少しそれを試みてみよう。

冒頭はこうだ。

① 太田豊太郎がエリスと出会うクロステル街は、ウンテル・デン・リンデンとはまったく異なる空間として意味づけられている。

見通しのスイッチを入れてみる。

「舞姫の話だ」「文学論? 舞姫の解釈?」「ページを見渡すと、〈空間〉をモチーフとしている。地図も示されている」「最後は?」

末尾の一文はこうだ。

⑥ それは同時にまた、豊太郎の自意識のかたい輪郭が溶けだして行く界面、その向こう側に無意識の世界との出会いが予感される境界を意味していたのである。

見通し。(クロステル街) / (ウンテル・デン・リンデン) という空間の対比と、

主人公豊太郎の(無意識) / (自意識) といった対比を重ねようとする議論ではないか? もしそうなら、追跡において念頭に置くのは、「クロステル街」とは何か、「ウンテル・デン・リンデン」とはここで何を意味するのか、豊太郎の意識とは何か、といったことであり、その他のことは副次的なことだ…。

見通しを持ちながら追跡する刑事は、犯人の行き先を先回りして捕らえることができるだろう。もちろん、追跡中に見通しは修正されなければならない。思いこみと見通しは別ものである。

都市論

この問題文は、都市論と関係がある。評論での頻出テーマだ。都市のありようは、そこに住む人々の内面を表す何かを意味している、という発想である。建築や空間構成などが、「書物」のように、何かを意味している。それを解釈しようとする方法である。

① ● 太田豊太郎がエリスと出会うクロステル街は、ウンテル・デン・リンデンとはまったく異なる空間として意味づけられている。ウンテル・デン・リンデンの大通りが、へだたりとひろがりをもったモニュメンタルな空間であるとすれば、こちらは内側へ内側へととぐろを巻いてまわりこむエロティックな空間である。かつてはベルリンの中核を形成していたこの古ベルリンの一面は、絶対主義王権の時代を境に、シュプレー川の西方に広がるフリードリッヒシュタットとドロテーアの両地区に、その役割をうばわれてしまった。この◆1見捨てられた街は、はるかな中世の記憶を凝固させたまま、その表面には無数の亀裂を走らせている。カイゼル帝国の政治戦略を演劇的に表現していたウンテル・デン・リンデンのパロック空間とはうらはらに、過密な人口と密集する家屋が作りだしていた暗鬱な景観は、**〔読1〕**支配と抑圧の構造を、その裏側から垣間見させていたのである。夜の闇に包みこまれようとするクロステル街の界限に、太田豊太郎が入りこんで行く『舞姫』の設定には、鷗外の意外に深い用意がかくされている。

▽対比に、ピンポイントでチェックをつけた。これは、見通し読みに基づいている。

・クロステル街：内側、エロティック、古い、暗い
 ・ウンテル・デン・リンデン：広がり、近代的、演劇的

◆問1「見捨てられた街」とはどのようなことか。

「この」という指示語に従う。「その役割を奪われてしまった場所」だということである。「その役割」とは？ ベルリンの中核という役割、が答え。

「解答例」「かつてのベルリンの中核という役割を、他の地域に奪われてしまった街だ」ということ。

●ある日の夕暮れなりしが、余は猷苑を漫歩して、ウンテル・デン・リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の僑居に帰らむと、クロステル街の古寺の前に来ぬ。余はかの灯火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取り入れぬ人家、類髭長きユダヤ教徒の翁が戸前にたたずみたる居酒屋、一つの梯はただちに楼に達し、他の梯は穴蔵住まひの鍛冶が家に通じたる貸家などに向かひて、凹字の形に引き込みて建てられたる、この三百年前の遺跡を望むごとに、心の恍惚となりてしばしばたたずみしこと幾度なるを知らず。

(現代語訳) ある日の夕暮れ時だった。僕は動物園を散歩して、ウンテル・デン・リンデンを通り過ぎ、モンビシユウ街にある自分の下宿に戻ろうとしてクロステル街界隈の古い寺の前に出た。僕はあの華やかな明かりが点された繁華街からこの狭く薄暗いエリアに入り、ベランダの手すりに干されているシーツや、下着をまだ取り込んでいない家や、類ひげを長く伸ばしたユダヤ教徒のじいさんが戸口にたたずんでいる居酒屋や、一つの階段はそのままの階に届き、別の階段が穴蔵住まいの鍛冶屋に通じているような貸家に向かって、凹の字型に引込んだように建てられているこの三百年前の遺跡を見る度に、心奪われ、我を忘れて佇むことが何度もあった。

② ●ウンテル・デン・リンデンの描写がそうであったように、鵓外はここでもベルリン風景のちょっとした確なディテイルを選びだす。たとえば、「穴蔵住まひの鍛冶が家」の地下室は、ヴィゼツテリイがいうように、ベルリンを訪れた外国人の好奇心をそそりたてる街頭の点景のひとつだった。どの街路でも見かけるこの地下室は、牛乳屋、パン屋、肉屋、食料品店、靴屋、家具屋などの小商人が店舗をかまえている場合が多く、ときにはピヤホールに改装されて陽気な気分が表通りにまであふれかえっていたという。

③ ●しかし、クロステル街そのものは、古ベルリン地区では明るく開けた大通りのひとつだった。

『舞姫』に描かれた「狭く薄暗き巷」の実景は、むしろクロステル街周辺の裏通りにのこされていた。たとえば、マリエン教会の筋向いから西北に通ずる横町で、中世の遊廓だったローゼン通りである。あるいは、パロヒアル教会のところでクロステル街と交叉しているパロヒアル通り。通りというより路地と呼んだ方がいいこの狭い横町には、地下室で営業する靴屋が密集し、路上には切りぎされた原料の皮革が散乱していた。それにモルケンマルクトからシュブレー河畔に通ずるクレイゲル路地が加えられる。とりわけ、クレイゲル路地は、一九三四年に改修されるまで、古ベルリン地区のなかでも、もっとも中世の佛をどめていた陋巷として知られていた。片山孤村の『伯林』(二九一三)には、この路地の実景がこう記されている。「入口は所謂門道で家を剝り抜いた形。中は幾百年の塵と煙とのために染め上げられ、壁落ちて煉瓦の骨あらはな三四階建ての家が傾きながら立ち並んでゐる。中世特有の建築法は上階ほど広く路次の方に突き出てゐて、空が狭くて光線の入りが悪い。路にはさすがに切石が敷き詰めてあるが、西側より中央に向かつて傾き、雨水や下水は中央を流れる仕組みになつてゐる。中世時代にはこゝに一切の汚穢を棄てたものであつた。クレイゲルは今は桶屋、ブリキ屋、靴直し、屑屋等の細民の巢窟になつてゐて、檐下には古い荷車が横倒しになつてあつたり、汚い洗濯物が掛け並べてあつたり、路次には鶏の一群が塵芥をつ

、き廻る。旅行者が這入つて行くとき暗い二階の窓から怪しげな女どもが物珍らしげに眺め下ろす。」
 ▽傍線部のみが重要。

④ ●鵓外の『舞姫』と片山孤村の『伯林』とは、四半世紀のへだたりがあるが、孤村のクレイゲル街の描写は、「クロステル街」のそのの◆2 詳細な脚注といたおもむきがある。鵓外は、マリエン街からクロステル街九七番地の下宿に移った一八八七年六月十五日の日記に、「今の居は府の東隅所謂古伯林(Alt-Berlin)に近く、或は悪漢淫婦の巢窟なりといふものあれど、交わりをこの隣に求むる意なければ、屑とするに足らず」としたためた。「クロステル街」の描写は、この「悪漢淫婦の巢窟」というイメージにあわせて、意識的に再構成されたものではないだろうか。三百年前の遺跡と伝えられる古寺院を貧街にとりあわせることで中世の雰囲気呼びこむという具合である。そういえば、エリスがたたずんでいた古寺院は、カイゼル・ウィルヘルム通りに面していたマリエン教会がそのモデルにあてられているけれども、「凹字の形に引き込みて」というかたちにはまる正面の寺院は、クロステル街の南手にあるクロステル教会こそがふさわしい。これもまた複数の教会を合成したイメージと考えていいのである。

▽傍線部のみが重要。「クロステル街」内側、エロティック、古い、暗い」という見通しは、修正する必要なし。ここで問題なのは、実際のクロステル街ではなく、「舞姫」というテキストの中で「クロステル街」が表現しているイメージである。予測どおり、⑤で、このことがまとめられる。

◆問2「詳細な脚注」とはどのようなことか。

☆傍線部延長術で。延長した部分をいかえる。注意したいのは、作品中の「クロステル街」は、実際のクロステル街ではなく、鵓外の創作したものであるという筆者の考えをふまえておくことである。

「解答例」「片山孤村のクレイゲル街の描写は、「舞姫」の中に作り上げられた「クロステル街」のイメージをくわしく説明したものであるかのように見えるということ。」

⑤ ●鵓外は、「クロステル街」を特定の場所を指し示す名辞であるよりも、古ベルリンの暗鬱な街のイメージ総体を表徴する符牒として『舞姫』のテキストのなかに象嵌した。何よりもそれはウンテル・デン・リンデンのバロック空間に対峙する反世界のしるしでなければならなかったのだ。

▽まとめ。見通しどおりの結論。

⑥ ●『舞姫』からウンテル・デン・リンデンを経て、「クロステル街」にまぎれこむ太田豊太郎の動線は、「かの灯火の海を渡り来て」、「この狭く薄暗き巷に入り」という対句を標識に二つに切りわけられる。

○【光と影】私たちはごく自然にウンテル・デン・リンデンを明るませていた灯影の残像を、夕闇に包まれた「クロステル街」の状況に重ね合わせることになるだろう。ガス灯と電灯のきらめきが、ウンテル・デン・リンデンの【読2】直線の大通りを浮きあがらせているとすれば、「クロステル街」は深い影をわだかまらせている【読2】迷路の空間であり、

○【点景人物】そこに配される点景人物は、歩道を闊歩する「胸張り肩聳えたる士官」や「巴里まねび」の「顔よき少女」にかわって、居酒屋の前にたたずむ「ユダヤ教徒

の翁」がえらばれる。中心からへだてられた周縁の領域の表象である。

○【視界】さらにつけくわえて言うと、天空にそびえたつ凱旋塔をはるかな消点として遠近法の構図を収斂させたウンテル・デン・リンデンの視角にたいして、「凹字形に引き込みて建てられ」た古寺院の扉をアイストッブとして収束するのが、「クロステル巷」の視界である。

○【女神像／エリス】豊太郎のまなざしを魅きつけるのは、この「鎖したる寺門の扉」に倚るエリスの姿であるが、それは凱旋塔の頂きを飾っていた勝利の女神像と一對のイメージをかたちづくっているようにおもわれる。(このモチーフは、少女マリイと「女神バワリアの像」を照応させた『うたかたの記』でもういちどくりかえされる。)

○一方には、遠近法の軸線にそって無限に広がる空間をひとすじに志向する視線があり、他方には閉ざされた空間のなかで街の表層をジグザグにゆれうごく視線がある(洗濯物と階段のイメージ)。あるいは「クロステル巷」の親密で秘めやかな空間の壁が視線を包みこんでしまうといいかえてもいい。さまざまな対象を一つに結び合わせて行くこの視線の統辞法から、◆3対峙する二つの異質な空間の構造があらわになるのである。

▽視線が捉えるものの対比によって、ウンテル・デン・リンデンとクロステル街の空間の違いが示されていることが確認される。対比をチェック。

◆問3「対峙する二つの異質な空間」とは何と何か。

どれぐらいの字数で書くかによって変わってくる。

【解答例1】「ウンテル・デン・リンデンとクロステル街」

【解答例2】「無限に広がる空間であるウンテル・デン・リンデンと閉ざされた空間であるクロステル街」

⑦ ●エリスと出会う以前の太田豊太郎を取りまく生活空間は、モンビシユウ街の宿とウンテル・デン・リンデンの北側にあった大学を結ぶ線を中心に構成されていた。日本帝国から派遣された国費留学生の立場と役割に疑いをもたなかった豊太郎の日常は、ベルリン中枢の制度的な空間、カイゼル帝国の権威と意志を表象するモニュメンタルな空間の暈のしたに抱えこまれていたのである。

▽空間と豊太郎の意識の関係。見通しに従って確認していく。へエリートとしての立場と役割の意識へ制度、権威、意志の空間へという重なりが見出される。これは、留学初期の豊太郎。

◆4この空間の呪縛から解き放たれるきっかけは、豊太郎がドイツの自由な大学の風に触れて、「奥深く潜みたりしまことの我」にめざめはじめたときに訪れる。しかし、同じ留学生仲間との社交をいさぎよしとしなかつた豊太郎は、「まことの我」を他者に向けてひらこうとはしない。「かの人々は余がともに麦酒の杯をも挙げず、球突きの棒をも取らぬを、かたくななる心と欲を制する力とに帰して、かつは嘲りかつ

は嫉みたりけむ。」——留学生仲間の嫉視と猜疑は、豊太郎をいっそう孤立した境位に追いつめて行く。

▽「舞姫」のストーリーを想起せよ。へエリートとしての立場と役割の意識の崩れへは制度、権威、意志の空間への矛盾を引き起こした。彼の〈新意識〉は、行き場所を失う。

◆問4「この空間の呪縛」とはどのようなことか。

「日本帝国から派遣された国費留学生の立場と役割に疑いをもたなかった豊太郎の日常」は、ベルリン中枢の制度的な空間、カイゼル帝国の権威と意志を表象するモニュメンタルな空間の暈のしたに抱えこまれていた」という部分に注目することはすぐにわかっただろう。

さて、問題は★解答の型を解きほぐすことだ。☆なんやそのままやんか式。「この空間が呪縛する、ということ。」さらに、「この空間が、何かを、呪縛するということ。」または、「この空間によって、何かを、呪縛されていたということ。」「呪縛」とは？自由にそうしているという感覚ではなくて、何かに行動を支配されている感じ。ここをうまくいいかえたい。

【解答例1】「ベルリン中枢の制度的な空間であり、カイゼル帝国の権威と意志を表象する空間が、日本帝国から派遣された国費留学生の立場と役割に忠実であろうとする意識を（豊太郎に）疑いえないものとして植え付けていたということ。」

【解答例2】「ベルリンの中心部という、制度と権威と意志を象徴する空間に生活することによって、（豊太郎は、）エリートとしての立場と役割の意識から自由になることができなかつたということ。」

●都会が提供する多様な快楽、他者との出会いの場をかたくなに拒みとおした豊太郎にとって、生きられたベルリンはいたるところに落丁があり、空白なページがのこされている書物であった。

▽へ制度、権威、意志の空間へ以外に、「都会が提供する多様な快楽、他者との出会いの場」はあつた。留学生仲間たちは、適当にそのような場所に遊び、力を抜いていただろう。しかし、豊太郎は、そういう場所には行かなかつた。ベルリンをテキスト（書物）にたとえれば、豊太郎は、それまでその一部へ制度、権威、意志の空間への章のみを読んだだけであつた。

●おそらく、その分だけクロステル巷の限界は、アイデンティティを回復するやすらぎの場としての意味をもちはじめるのである。クロステル街の一角にそりたつ古寺院をふりあおぎながら、束の間の恍惚感に身をゆだねる豊太郎の体験は、ベルリンの中心的な部分から疎外され、逸脱してしまつた彼がしだいにその周縁的な部分に魅きつけられて行く過程を指し示している。それは同時にまた、【読3】豊太郎の自意識のかたい輪郭が溶けだして行く界面、その向こう側に無意識の世界との出会いが予感

される境界を意味していたのである。

▽中心的な部分から疎外され、逸脱し孤立した豊太郎→アイデンティティを回復するやすらぎの場へ。豊太郎の内面の変化は、空間（世界）の変化と同期している。ひっくり返せば、豊太郎の空間の移動は、彼の内面空間の移動を意味しているのである。

■見通しの確認

「〈クロステル街〉／〈ウンテル・デン・リンデン〉という空間の対比と、主人公豊太郎の〈無意識〉／〈自意識〉といった対比を重ねようとする議論ではないか？」という見通しは、当たっていたといえる。

〈ウンテル・デン・リンデン〉制度と意志と権威、栄光に満ちた空間。そこに生きる自分にアイデンティティを見出していた豊太郎。その芯まで固い自意識は内側から溶けかけたが、表面の固い輪郭はそのまま。彼はその自我の分裂のせいで、疎外され、空間を移動し始める。

〈クロステル街〉エロティックな影に満ちた空間。女性の胎内のような、懐かしい場所。猥雑な欲望のうごめいている場所。豊太郎は忘れていた無意識の世界へ入り込んでいく。

■読解問題1「支配と抑圧の構造を、その裏側から垣間見させていた」とはどのようなことか、説明しなさい。

一文全体を検討しなければいけない。「カイゼル帝国の政治戦略を演劇的に表現していたウンテル・デン・リンデンのバロック空間」とはうらはらに、〈過密な人口と密集する家屋が作りだしていた暗鬱な景観〉「クロステル街は、支配と抑圧の構造を、その裏側から垣間見させていたのである。」

クロステル街からは、支配と抑圧の構造が見える。一文を通してみると、この支配と抑圧の対比は、支配「ウンテル・デン・リンデン的空間（政治権力の集まっている場所）」／被支配「クロステル街的空間（忘れ去られた貧しい街）」という構図になっていることがわかる。

解答は、この一文全体の対比をできるだけすっきりいかにえる。

〔解答例〕「クロステル街の過密で暗い景観を見ると、ウンテル・デン・リンデンが政治権力によって支配する側を象徴する空間であり、一方、クロステル街は抑圧されている側を象徴する空間であることがわかる、ということ。」

■読解問題2「直線の大通り」「迷路の空間」に込められた意味は何か、説明しなさい。

「直線」を象徴するものはいくつもあげられている。それをまとめたのが「無限に広がる空間をひとすじに志向する視線」であった。一方、「迷路」に現れるのは、「閉ざされた空間のなかで街の表層をジグザグにゆれうごく視線」「親密で秘めやかな空間の壁に包み込まれる視線」である。

「視線」を「意識」に変換すれば、これらの空間的な表現が意味する意識的なものを説明したことになる。

・「無限に広がる空間をひとすじに志向する意識」

・「閉ざされた空間のなかで街の表層をジグザグにゆれうごく意識」「親密で秘めやかな空間の壁に包み込まれる意識」

解答は、二つのレベルで書ける。

一つは、これらの意識を社会的な階層の意識として書くもの。

二つめは、豊太郎の意識として書くもの。

三つめには、両者をとともに書くもの、も考えられる。

〔解答例1〕「直線の大通り」は、無限に広がる空間をひとすじに志向する政治権力の意識を表し、「迷路の空間」は、権力から遠ざけられた空間のなかに閉じこめられた意識を表している。」

〔解答例2〕「直線の大通り」は、国費留学生としての立場と役割を果たしていることとする豊太郎の意識を表し、「迷路の空間」は、その意識を疑い、癒しを求めようとする豊太郎の意識を表している。」

〔解答例3〕「直線の大通り」は、無限に広がる空間をひとすじに志向する政治権力の意識と、国費留学生としての立場と役割を果たしていることとする豊太郎の意識を表している。「迷路の空間」は、権力から遠ざけられた空間のなかに閉じこめられた人々の意識と、エリート意識を疑い、癒しを求めようとする豊太郎の意識を表している。」

■読解問題3「豊太郎の自意識のかたい輪郭が溶けだして行く界面、その向こう側に無意識の世界との出会いが予感される境界」とはどのようなことか、説明しなさい。

「ごちゃごちゃにならないように☆解答の型」を。一文全体を見ると「それは同時にまた、：界面、：境界を意味している」「それ」とは？ クロステル街、または、古寺の前でうっとりとなっていた体験。彼の心が変化していくきっかけとなった体験・場所なのである。豊太郎の心が：から：になっていったきっかけとなる場所であるということ。

「豊太郎の自意識のかたい輪郭が溶けだして行く」

国費留学生としての立場と役割を果たそうとする志、周囲となじまない孤立した心境が崩れていく。

「無意識の世界との出会いが予感される」

潜んでいた本当の自分を実現する予感。もちろんそれは、エリスとの出会いがきっかけとなる。

〔解答例〕「豊太郎の、国費留学生としての立場と役割を果たそうとする志や周囲となじまない孤立した心境が崩れていき、エリスとの出会いを通じて、潜んでいた本当の自分を実現するきっかけとなる場所であるということ。」

■論述への挑戦

自分の体験のなかで、空間の移動が、意識の変化を引き起こした例を見つけ、本文に沿って論じなさい。八百字以内。